

中国古典詩聚花

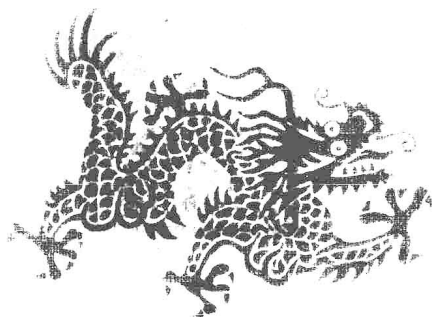
山水と風月

5



中国古典詩聚花
山水と風月

前野直彬 監修
向島成美 著



中国古典詩聚花 山水と風月 ⑤

昭和五十九年十月二十日 初版第一刷発行

定価一四〇〇円

著者

向島成美

発行者

相賀徹夫

発行所

株式会社 尚学図書

発売所

株式会社 小学館

101 東京都千代田区一ツ橋二―三―一
電話 業務(〇三三)三三〇―五三三三

販売(〇三三)三三〇―五七六四
振替口座 東京八一二〇〇

印刷所

株式会社 東京印書館

© Shōgakutosyo 1984

Printed in Japan

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害
となります。あらかじめ小社あて許諾を求めて下さい。

* 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-09-915005-4

目次

解 説 五

魏・晋・南北朝時代 — 自然美の探究 二

歩出夏門行

曹 操 三

廬山に登る

鮑 照 四

芙蓉池の作

曹 丕 六

月を城西門の解中に翫ぶ

鮑 照 四

始寧の墅に過る

謝靈運 三

東田に遊ぶ

謝 朓 五

石壁精舎より湖中に還りて作る

謝靈運 六

荆山を望む

江 淹 五

石門の最高頂に登る

謝靈運 三

山中雜詩 三首 其の一

吳 均 五

湖に泛かび歸りて

山 齋

庾 信 五

樓中に出でて月を翫ぶ

謝惠連 三

勅勒の歌

斛 律 金 五

唐 代 — 自然と人生 六

春江花月しゅんかうかげつの夜よ

張若虛ちやうじやくきよ 古こ

夜よ 鹿門ろくもんに帰かへる歌うた

孟浩然もうこうねん 古こ

終南山しゅうなんざん

王維わうい 三さん

山居秋暝さんきしゅうめい

王維わうい 六ろく

香積寺かうじきじに過よぎる

王維わうい 六ろく

木蘭もくろん 柴さい

王維わうい 三さん

峨眉がび山さん月げつの歌うた

李白りへい 六ろく

静夜思せいやし

李白りへい 三さん

天門山てんもんざんを望のぞむ

李白りへい 四し

廬山ろざんの瀑布ばふを望のぞむ 二首 其の二

李白りへい 一七いちしち

蜀道難しゆくどうなん

李白りへい 二に

夜月やげつ

劉方平りゅうほうへい 三さん

岳がくを望のぞむ

杜甫とほ 三さん

絶句ぜつく 四首 其三

杜甫とほ 二に

(兩個黃鸝鳴翠柳)

杜甫とほ 二に

絶句ぜつく 二首 (遲日江山麗)

杜甫とほ 三さん

絶句ぜつく 二首 其二 (江碧鳥逾白)

杜甫とほ 三さん

鶴雀樓かくせきろうに登のぼる

王之渙かうしかん 三さん

滁州西澗ちしゅうさいかん

韋應物いおうぶつ 四し

秋風引しゅうふういん

劉禹錫りゅううしやく 四し

漁翁ぎよおう

柳宗元りゅうそうげん 一いち

中夜ちゅうや 起おきて西園さいえん

柳宗元りゅうそうげん 一いち

を望のぞみ 月つきの上のほるに値あう

柳宗元りゅうそうげん 一いち

山石さんせき

韓愈かんゆ 一いち

暮江吟ぼかうぎん

白居易はくきやうい 一いち

錢唐湖春行せんとうこしゅんこう

白居易はくきやうい 一いち

宣州せんしゅうの開元寺かいげんじの水閣すいかくに題だいす、

白居易はくきやうい 一いち

閣下かくかの宛溪えんけい、溪けいを夾はさみて

白居易はくきやうい 一いち

人ひとを居からしむ

杜甫とほ 一いち

山行さんかう

杜甫とほ 一いち

宋代

—自然と人間との調和—

一七

豊楽亭遊春 三首 其三

歐陽修 一〇

雨中 岳陽樓に登り

魯山山行

梅堯臣 一三

君山を望む 二首 其二

船を瓜州に泊す

王安石 一五

泗州東城晚望

六月二十七日 望湖樓醉書

賞心亭に登る

五絶 其一

蘇軾 一六

橫塘

湖上に飲む、初めは晴れ

新市の徐公店に宿す 二首 其一

楊万里 三四

後に雨ふる 二首 其二

蘇軾 一九

除夜に石湖より苕溪に帰る

月夜 客と酒を

十首 其一

姜夔 二七

杏花の下に飲む

蘇軾 一四

元・明・清代

—自然詩の継承—

三三

黄華山に遊ぶ

元好問 三三

金陵雨花台に登り 大江を望む

高啓 三六

陰山を過りて人の韻に和す

耶律楚材 三三

秋江詞

何景明 四〇

二月十一日、崇国寺にて月を踏む

袁宏道 二三

京師に在りて作る。十有四首

江上二首 其の一

王士禛 二毛

を得 其の十二

龔自珍 二六

十二月十五夜

袁枚 二六

七月十五夜 暑甚だし、

雜詩、己卯、春より夏に徂り、

月を見て曉に達す

黃遵憲 二六

付録

作者索引

二五二

詩題画面数引き索引

二五二

凡例

(1) **読み下し文** 本書では、原詩は旧字体を用いたが、読み下し文は、常用漢字を用いるとともに、すべての漢字に読みがなを施して読みやすくしてある。

読みがなと送りがなは、**新かなづかい・新送りがな**を用いて、わかりやすい読みにしてある。

(2) **押韻** 本書では、詩の形式とともに、語釈の項の末尾に韻字を示してある。また換韻の箇所は「」を用いて示した。(唐代以降の詩については、韻目を平水韻によって示してある。)

(3) **長詩について** 本書では、興味深い長い詩を数多くとり上げているが、長詩の場合には、ポイントを落として幾章句かに分け、口語訳を読み下し文の下に対応して示したり、語釈もその章句ごとに付すなど、読解しやすいように便宜を図ってある。

解説

中国の詩と自然

景と情

詩が自然の景をうたうのは、およそ世界のどの国の詩にも共通することではあるだろう。しかし中国の詩は、とりわけ自然の描写に熱心な文芸であるように見受けられる。実際、中国のどんな詩人の集をとってみても、遊覧の詩のように自然の景を直接に対象にする作品の場合はむろんのこと、もっと広く社会、人事をテーマとするような作品の場合であっても、自然の描写を含まないものは稀である。中国の詩において、自然の景はほとんど不可欠の素材であったといってもよさそうだ。

そして、『唐詩選』と並んでわが国にもよく親しまれてきた、南宋の周弼の『唐賢三体詩法』（いわゆる『三体詩』）は、ただ単に唐詩の選集というばかりではなく、「詩法」という名からもうかがえるように、詩人のために作詩の法則を示すことを意図しているところに大きな特色があるのだが、この周弼の詩法も自然の景の描写を重視している。周弼はこの書で、七絶、七律、五律という詩形三体による大まかな分類のほかに、詩句を「虚」「実」の二類に分ち、詩全体の中で「虚」の句、「実」の句がいかに配置されるかという点に着目した作品の分類を行った。その「虚」とは、いわば抽象的な思想感情が述べられたものを指すし、一方の「実」が、具体的な形を持った外界の景の描写である。つまりここでは、広く一般の詩において、自然の景の描写が抒情表現と並ぶ詩の表現上の重要な核に据えられているのであ

る。このように詩の表現を景情の両面から見ようとするのは、中国の詩論ではほぼ一般的な考え方であるし、またやがては、景と情が巧みに融け合い、両者が渾然一体となったところに詩の最高の境地を見ようとする考え方も中国詩一流の美学としてよく行われている。

江山の助

そしてさらに、詩人の表現行為そのものが自然の景と深い関わりを持つという認識も、中国には古くから存在した。たとえば、六朝梁の劉勰が著した文芸理論書『文心雕竜』の「物色」篇の説がそれである。「物色」とは、自然の風物の姿を意味することばであって、この篇では文学における自然という問題がもっぱら論じられるのであるが、その論は「物色の相召くに、人誰か安きを獲ん」といい、「情は物をもつて遷り、辞は情をもつて発す」というように、自然物からの誘いかけによって人の詩的感情が触発され、文学が成立するという考えに立脚している。また劉勰は「かの山林と皐壤（水辺の地）のごときは、実に文思（詩情）の奥府なり」と述べて、山水の景が文学創作に対して持つ意義を強調し、「江山の助」つまりは自然の援助によってすぐれた詩情が生まれると説いた。

こうした中国の批評家みずから意識するように、中国の詩は自然ときわめて深い関わりを持っていた。「詩は志を言う」と定義されるごとく、中国の詩はたしかに個人の抒情を本質とするものではあるけれども、その抒情が自然の景と分かちがたく結びついているという事実も中国の詩の大きな特色である。

中国自然詩の流れ

古代歌謡

『漢書』芸文志などの古い文献中に、「登高能賦」つまり山に登って詩を作ることを、教養人の重要な資格とする記載がよく見えている。そうしてみると、自然を観察して作詩する

習慣は、よほど古くからあったようだ。しかし、自然を純粹に詩の対象とし、自然美そのものをうたうことを目的とした、いわゆる叙景詩、自然詩と呼べるほどのものは、まだ古代の作品には見られない。

中国古代の詩集といえば、北方黄河の流域で生まれた古代歌謡の『詩經』、そして『詩經』に少しく後れてこんどは南方長江流域の楚の地におこった『楚辭』である。むろんこれらの作品に自然の描写がないわけではなく、たとえば『詩經』「桃夭」の「桃の夭夭たる、灼灼たる其の華」などは、すぐれた自然描写の句といってよい。ところが『詩經』の場合の自然描写は、「興」と呼ばれる比喩表現として用いられるのが一般であって、「桃夭」の場合も「この子于き帰ぐ、その室家に宜しからん」とうたい継がれるように、嫁いで行く若くはなやいだ娘をことほぐための表現であり、抒情のための手段であった。

また『楚辭』の場合になると、長江流域の豊かな自然が舞台となるだけに、いきおいその自然描写は豊富になるし、かつ精密さも増した。たとえば「九歌」の「湘夫人」に見える「嫋嫋たる秋風、洞庭波だちて木葉下つ」などは、洞庭湖畔の秋の景を描いて、見事に成功した例である。しかしそれも作品全体から見れば、『楚辭』特有の感傷的な情緒を盛り上げるべく配置されたものであって、やはり自然そのものをうたうことに主要な関心があるとはいいたい。思うに、古代人にとっては、自然は親しむべき対象というよりは、むしろ畏敬すべき存在として見られることが多かったであろう。そうした古代人の自然観からは、自然美そのものを賛美する文学は生まれにくかったのである。

魏・晋・南北朝

魏晋南北朝の時代に至ると、詩人たちが古代の神秘的な自然観から次第に解放され、自然に親しむ態度を持つようになってきたのと同時に、純粹に自然の美を詠ずる詩が登場した。とりわけ、風光明媚な江南の地に華やかな貴族文化が栄えた、東晋から南朝にかけての時

代は、中国自然詩の歴史の上できわめて重要であり、西暦五世紀の前半には注目すべき二人の詩人が出ている。田園詩の祖とされる陶淵明と、山水詩の祖とされる謝靈運がそれである。

彼ら二人はまさに中国自然詩の開拓者というのにふさわしいのであるが、二人の自然に対する関心のあり方はたがいに異なっていた。陶淵明の場合は、権力社会から隔絶した農村の生活に真実の生き方を求めたために、その中に人間の営みを含む田園の自然に心を寄せた。一方それに対して謝靈運の場合は、当代きつての大貴族でありながら政治の場で主流たり得なかった鬱情を解消すべく、非日常的な山水の自然を追い求めており、人間を排除した幽邃な山水の自然がひたすら美的対象としてうたわれる。こうした陶・謝二様の自然詩のうち、陶淵明的な自然詩が当時としてはむしろアウトサイダーであって、次の唐代に至るまであまり顧みられることがなかったのにくらべ、謝靈運が創造した山水詩はその後も多数の祖述者を得ながら一世を風靡した。中国の自然詩は、山水の美を発見した謝靈運の出現によって、はじめてその独自の地位を確立したといえるのである。

唐

以上の魏晋南北朝期に続く唐の時代は、中国の詩の黄金時代であり、自然詩の面でも実に豊かな成果をあげている。この時代には、李白、杜甫の二大詩人を筆頭に、世に「王孟韋柳」と併称される自然詩派の巨匠たちが輩出した。「王孟韋柳」とは、盛唐期の王維、孟浩然と中唐期の韋應物、柳宗元であるが、とりわけ注目すべきは王維である。

詩人王維が同時に山水画家としても優れていて、彼の芸術における詩画一体の境地を宋の蘇軾が「詩中に画あり、画中に詩あり」と評したことはよく知られている。まことに王維は清浄な山水の自然に深く自己を没入させ、視覚的イメージの豊かな詩をうたいあげた。彼の山水詩は、代表作とされる『輞川

集』の諸作に見られるように、周弼しゅうへいのいう「夷」の句で全篇が貫かれた純粹叙景の作を少なからず持つ。しかもそこにうたわれる自然には、人を突き放すような冷淡さがなく、あくまでも穏やかな雰囲気のかで、人間が自然と一つに融けあっている。前代の陶・謝によって開拓された中国の自然詩は、王維によって新たな展開を遂げたといえる。

中国最大の詩人とされる李・杜の二人も、優れた自然詠を数多く残した。李白は、月光に代表される清澄な自然をこよなく愛し、また山川が繰り広げる壮大な自然の姿をダイナミックに描いて、広く人々の共感を呼ぶ。杜甫は、人間存在への深い思索を込めつつ、対象の自然をリアルな筆致で描き出した。ことに緻密な構成に支えられて、景情が見事に融合した詩境は、後世の詩人たちが模範と仰ぐものであっただけに、その功績はあまりにも大きい。

宋

宋詩は、その担い手である文人官僚たちが余裕のある樂觀的な人生觀の持ち主であつたから、いきおい唐詩的な激しいエネルギーは喪失そうしつしつつも、逆に理智的で平淡な詩風を開拓することによつて、中国詩の歴史の上で唐詩と並びたつ輝かしい存在となつた。自然詩もその例外ではなく、宋代詩人の自然を見る目には、おおらかな落ち着きさえ感じられる。たとえば蘇軾そしきが「江山風月、本常主もとじょうしゅなし。閑なる者、便たやすちこれ主人なり。」（『東坡志林』巻四）と述べて、人間に等しく与えられた自然の美しい景觀をほしいままに満喫しようとした態度などは、宋代詩人ならではの自然觀の現れである。また自然物を擬人化してうたうのは、蘇軾を筆頭として宋の詩人たちが好んで行ったことであり、宋詩の自然描写の大きな特色であるが、これも宋の詩人が余裕ある態度で自然を見つめ、自然に親近感を抱いていたことをよく物語つていよう。

元・明・清

こうして宋詩が唐詩とは異なる詩の様式を打ちたてて以後、元明清の時代に至ると、詩人たちはそれぞれの立場で詩の新たな可能性を追求してはいるけれども、前の唐宋二代の詩の遺産がかれらにとってあまりにも偉大でありすぎたためか、それらを大きく超えることはできなかったようだ。個々にはすぐれた詩人を出しながらも、全体としては中国古典詩が衰微へと向かう時代であったといつてよいだろう。

本書の構成

さて本書には、上述のごとくにして魏晉南北朝より以来、絶えることなく作り続けられてきた、山水風月の自然をうたう詩の中から六十首を選んで採った。もっとも中には自然そのものをテーマとしたとはいえない作品も含むけれども、それはその詩の自然描写がすぐれるとの判断からである。ただし陶淵明の田園詩のように、本シリーズで別に巻が用意されているものについては、割愛した。

作品は、魏晉南北朝、唐、宋、元明清という時代順の四期に分けて収めた。作品の選択が一つの時代に偏らないように心がけたが、唐代はすぐれた詩人が集中しているので、いきおい他の時代に比べると多くの作品を採っている。各作品の語釈、鑑賞については、作品の理解を深めるために、やや詳細にした。その際、先学の研究からは多くの教示を受けた。諸先学に対し、あらためてあつく感謝したい。

はじめにも述べたように、中国の詩において自然描写が果たしている役割は大きい。われわれが中国の詩を読んで魅惑されることの一つには、たしかに自然描写のすばらしさがある。本書が採りあげた詩人、作品の数はごくわずかではあるが、そのすばらしさの一端なりとも伝えられれば幸いである。

魏・晋・南北朝時代

— 自然美の探究

巖は峭しくして嶺は稠疊たり
洲は縈りて渚は連綿たり
白雲は幽石を抱き
緑篠は清漣に媚ぶ

「過始寧墅」謝靈運



嵩山

（山東省）

歩出夏門行

觀滄海

歩出夏門行

滄海を觀る

曹

操

(魏)

東臨碣石

以觀滄海

水何澹澹

山島竦峙

樹木叢生

百草豐茂

秋風蕭瑟

洪波湧起

日月之行

若出其中

星漢粲爛

東のかた碣石に臨み

以て滄海を觀る

水何ぞ澹澹たる

山島竦峙す

樹木叢生し

百草豐茂す

秋風蕭瑟として

洪波湧起す

日月の行

其の中より出づるが若し

星漢は粲爛として

若出其裏

其の裏より出づるが若し

幸甚至哉

幸い甚だ至れるかな

歌以詠志

歌いて以て志を詠ぜん

東に向けて碣石山に登り立ち、大海原を眺めやると、波がいかにもゆったりと揺れ動くなか、海に囲まれたこの山はすつくとそびえ立つ。ここには樹木が群がって生え、多くの草がいっぱいに生い茂っている。木々の梢をわたる秋風はものさびしい音をたて、打ち寄せる大波はわきたつ。太陽や月の運行は、この大海のなからわきでて始まるようだし、きらきらと輝く天の川もこの大海のなから昇ってくるようだ。ああ、何と幸福なことか。歌をうたって私の気持ちを表そう。

○滄海 大海。ここでは、東海、渤海を指す。

○碣石 山名。今の河北省昌黎県の北にある碣石山とする説や、『漢

書』地理志に「驪成（県）大碣石山 県の西南に在り」とあり、北魏の酈道元の『水経注』に碣石山が海中に没したところから、この山は六朝時代に今の河北省樂定県の西南にあった驪成故城の西南の海中に没したとする説などがある。○澹澹 波の静かに揺れ動くさま。○竦峙 そびえたつ。○蕭瑟 秋風が樹木にあたってたてる音の形容。○星漢 天の川。○粲爛 星のきらきらと輝くさま。

◆四言古詩。韻字は、海・峙・茂・起・裏。

碣石山に臨む

『三国志』の英雄魏の曹操の作である。有名な赤壁の戦いの前年

に当たる建安十二年（二〇七）の秋、曹操は烏桓を柳城（今の遼寧省朝陽県）に討った。烏桓は、当時、中国東北部の三郡（遼東、遼西、右北平）に一大勢力を誇っていた遊牧民族、東胡の一種族で、遼西烏桓の蹋頓を中心としてしばしば中国の北辺を脅かしていたし、また曹操初期のライバルで、先の官渡の戦いで曹操軍に撃破された袁紹の殘党がここに身を寄せていたこともあって、北方の不安を一掃せんがための遠征であった。この詩は、その遠征の途次に、碣石山に登った時のことをうたったものである。碣石山は古くは『尚書』禹貢編にも渤海に臨む山として記され、秦の始皇帝や漢の武帝も訪れたことのある由緒ある山だが、その具体的な位置については諸説があつて一定しない。昌黎県の北にある現在の碣石山では、やや渤海の岸から離れすぎていて曹操の詩の内容とそ

ぐわないし、地形の変化によつて海中に没したとする説も確たる証拠がなく、結局は不明とする他はない。いずれにせよ、烏桓を征討し、やがては中国全土の掌握を目指す曹操が、秦の始皇帝や漢の武帝にならつての登臨であつたことには相違なからう。

詩は碣石山から望んだ渤海の雄大な景觀の描写が何よりもすばらしい。「水何ぞ澹澹たる、山島竦峙す」は、眼前に広がる大海原と海岸にそそり立つ碣石山を鳥瞰的に描いたものであろうし、「樹木叢生し」以下の四句では、草木の茂る碣石山の情景と眼下に寄せる大波とが近景として描かれてゐる。日月、星漢をもその中に包み込めるとうたわれる大海は一世の英雄たるにふさわしい曹操自身の氣概の現れでもあるようだ。後に触れるように結びの二句は、詩の内容と直接の關係を持たない部分であるから、この詩は一首全体が叙景で貫かれてゐるといってよい。このような作品